特集 「統一合判」中学入試レポート vol. 1

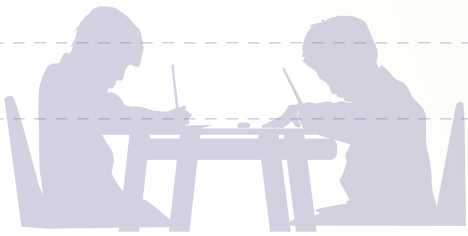
保護者の意識と教育の変化から

多様化した入試にチャンスを見出す！

～2016年入試結果から探る、2017年首都圏中学入試展望～

皆さんの先輩にあたる受験生とその保護者が、2016年の中学入試に親子で挑んだ2月から、すでに2ヶ月が過ぎた。今回は、新6年生になった皆さんが初めて迎える小6「統一合判」テストだ。前回1月10日の「統一合判」（5年生最終回）のときには、「2016年入試をしっかり見据えて、親子で新たなスタートを！」と述べた。今回は、この2016年の入試結果から読み取ることができる、来春2017年入試の展望をお伝えしよう。

また、お子さんたちが来春2017年の中学入試を経て、それぞれ進学した中高一貫校から大学入試に挑む2023年には、大学入試のあり方が大きく変化する。その動きも見据えて、わが子にとっての最良の教育環境を考えていただきたいと思う。



首都圏模試センター

私立中学校の入試が多様化し、2年続きで受験生数が増加した2016年の首都圏中学入試

2016年の首都圏中学入試が一段落して、すでに4月を迎えた。この記事をご覧いただく4月17日（日）「統一合判」の頃には、1～2月の中学入試を突破して、それぞれの志望校に進学した新中学1年生の皆さんとご家族は、おそらく満開の桜に迎えられての華やかな入学式を済ませ、新たな中学校生活に馴染もうと日々元気に過ごしている頃だろう。

そして、来春2017年の中学入試にチャレンジしていこうとする新6年生の皆さんにとっても、ここからが新たなスタートだ。

それでは、この春の新たなスタートの時期に、今春2016年の中学入試の結果に見られた、いくつかの動きをご紹介していこう。

最初にお伝えしたいことは、今春2016年の首都圏中学入試では、2年続きで受験者数が増加に向かったということだ。前年比500名の微増ではあるが、昨年8年ぶりに増加に向かった受験者数のカーブが今年も引き続き増加したことからは、中学受験と中高一貫教育への注目や期待が再び高まりつつあることが感じ取れる。

もうひとつは、これも昨年から目立ってきた傾向だが、受験生の保護者の価値観や意識、そして小学生の受験準備のスタイルの変化と多様化が目立ち、これに応じた私立中学校の入試形態にも多様化が非常に目立ったことだ。

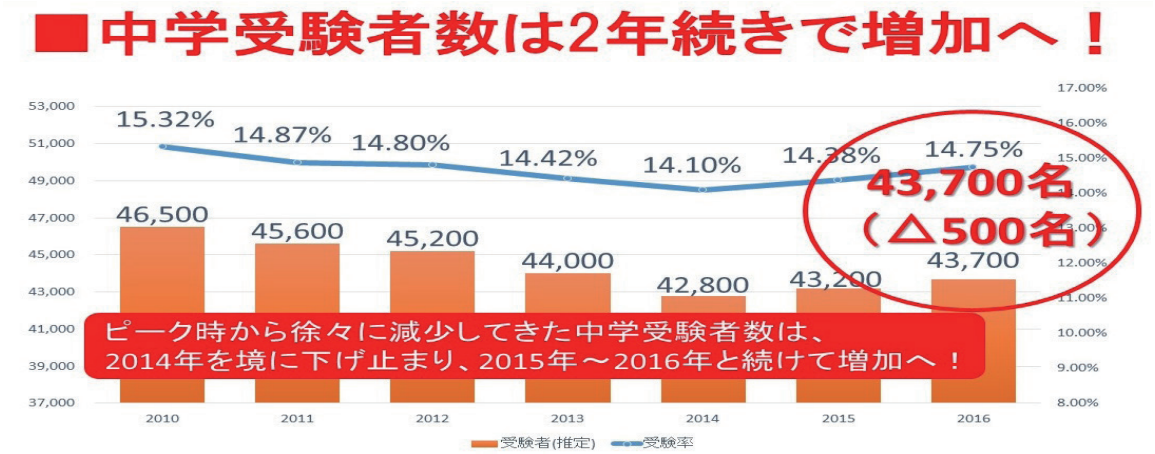
先の受験者数の増加の背景には、こうした従来とは違った中学受験生と保護者の動きの「変化と多様化」の影響がある。

この後にも紹介しているように、私立中学校の入試には、従来の「4科目（国･算･社･理）や2科目（国･算）」の筆答試験を課す形態だけではなく、公立中高一貫校の志望者にも併願しやすい「適性検査型（思考力･PISA型）入試」をはじめ、「英語（選択）入試」や「ＡＯ入試」などの新たな形態の入試が増え、今年はついに「習い事（自己アピール）入試」が初めて登場するなど、この1～2年で急速な多様化が進んできた。

実は一方で、従来のように小学校4年や5年の最初から3年ないし2年間、進学塾に通ってきた受験生の数は、多くても昨年並みか、やや減少したと見られている。

そうした塾通いを経て「4科目ないしは2科目」の受験勉強をしたうえで私立･国立中学の入試に挑む受験生が依然として主流であることは事実だが、そうではない学習歴や活動歴を経てきた小学生も増えている。そうした子どもたちとその保護者が、この1～2年で急速に多様化した私立中の入試に着目し、以前より数多く中学受験にチャレンジするようになった。その結果、トータルな受験生数が増えてきたのである。

こうした動きの背景には、いくつかの理由と傾向がある。ひとつは、現在の小学生の若い保護者には、それより年上の世代とは少し違った



価値観や志向があり、わが子の小学生時代の過ごし方として中学受験のための塾通いを優先的に選ぶ家庭が、以前よりやや少なくなったという傾向だ。むしろ、わが子の小学生時代には、「できるだけ多様な経験をさせたい」と願い、様々な「習い事」をさせる家庭が増え、塾通いもそのなかのひとつと位置づける感覚を持つ保護者が増えてきた。

もうひとつには、わが子が当事者となる「2020年大学入試改革」の動きに対しても敏感に反応し、将来のグローバル社会で求められる力として、わが子の習い事のひとつに英語（英会話）学習を選ぶ家庭が増えたこともあげられる。

様々な習い事やスポーツなどの活動体験を通して、多様な人々と触れ合うことで、「協調・協働」体験をさせたいと考える保護者も増えてきた。これも、この先の大学入試や「ダイバーシティ化」した社会で求められる「コミュニケーション・コラボレーション力」を育てたいと願う保護者の考えの反映ともいえるだろう。

そしてもうひとつ、やはりこの先の大学入試や社会で求められる「思考力・判断力・表現力」を育てるために、中学入試でも、「正確な知識の多寡」よりも、むしろ、未知の問題に直面したときに「その場で考え、解決方法や自分の考えを自分の言葉で表現する」力を求めるような「思考力・表現力」重視の入試問題が増えたことがあげられる。

先に述べた「適性検査型（思考力・PISA型）入試」や、「教科横断型（合教科型・総合型）入試」、「記述・論述型入試」などの形態が増えたのは、そうした新たな入試形態に賛同し、こうした入試問題にチャレンジしたいと考える受験生と保護者が増えたことにもよるだろう。

保護者の教育への注目を喚起した「2020年大学入試改革」の方向性とそこで問われる新たな学力観・学習観

ところで、この2016年入試のシーズンに発行された教育・受験関係の書籍に、『2020年の大学入試問題』（石川一郎著。講談社現代新書）と、『ルポ塾歴社会』（おおたとしまさ著。幻冬舎新書）という、2冊の新書がある。この両著を、来年以降の中学入試を読み解くヒントが紹介されている本として注目したい

左の『2020年の大学入試問題』は、今年の中学入試でも人気上昇が見られ、いわゆる「21世紀型教育」推進校としても知られる、かえつ有明中高の石川校長の著書。ここには、現在の小学生が大学入試を迎えたときに求められる力と、その力を育てる新たな教育のあり方が、具体的な事例で紹介されている。

一方の『ルポ塾歴社会』のサブタイトルは「日本のエリート教育を牛耳る『鉄緑会』と『サピックス』の正体」。ご自身も麻布中高のOBで、教育や育児まで幅広い著書を持つおおた氏が、東大をはじめとした難関大学に合格する多くの優秀生を育てる進学塾と、その周辺構造を読み解く独特の内容だ。

この両著で紹介されている内容についての感じ方や意見は、保護者や教育関係者の間で様々に分かれるとは思うが、これから中学受験を迎える保護者にも参考になる、貴重な問題提起がされている本であることは間違いない。やはり今後の大学入試の行方に関心を持つ人は少なくないということだろう。

今春の中学入試でも、その「2020年大学教育改革」の先にある、「今後のグローバル社会で求められる力」を明確に意識し、自校の中高6年間の教育で育てていこうとする新たな力と、そのために必要な教育の方向性や授業のスタイルを鮮明に打ち出した私学が人気を高めた。

昨年2015年入試で、のべ2,100名を超える

多くの志願者を集めて“台風の目”となった三田国際学園は、今年はさらに、3,000名を超す大人気となったことをはじめ、開智日本橋学園、かえつ有明、工学院大学附属、聖学院、大妻中野など、いわゆる「21世紀型教育」を標榜する私学が人気や難易度を高めたことは、こうした教育の変化に対する保護者のアンテナの高さを反映したものといえるだろう。

今回の「2020年大学入試改革」の狙いは、大まかな表現をすると「知識の蓄積を限られた時間で正確にアウトプットする力」を問う現在の（多くの）大学入試のあり方を、「得られる知識を使って、課題を発見～解決する思考力·表現力·コミュニケーション能力」などを問う入試に変革しようとするものだ。

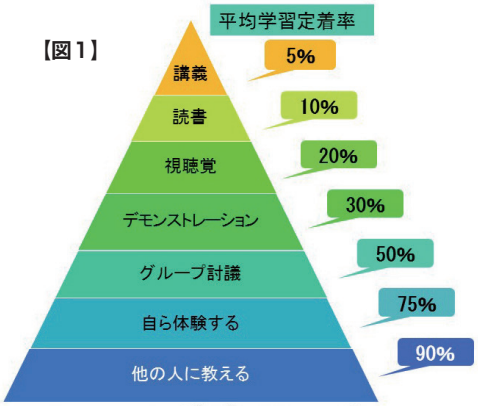
それは明らかに、明治期から今日まで受け継がれてきた従来の「学力観·学習観·入試観」を含めた「教育観」そのものを大きく変えようとするものでもある。

今後の社会で求められる力を中高6年間で育てていくためのアクティブラーニングと「21世紀型教育」

たとえば、最近教育の世界で紹介されることの多くなった、アメリカ国立訓練研究所(National Training Laboratories)によって開発されたといわれる「ラーニングピラミッド」という、学習の手法と学習効果の関係を段階に分けて説明したモデル図【図1】がある。そこでは上から下に向かうにつれて学習効果が高まる（%が上昇する）といわれている。 講義をただ聞くよりも、討論したり、体験したり、学習者自身が教えた方が学習効果は高まるという説で、学習者に主体性を持たせるほど効果的という考え方だ。

こうした考え方を学習のスタイルに反映させたものが、先の「アクティブラーニング」であり、「PBL（Project-Based Learning＝課題解決型学習）」や「PIL（ピアインストラクションレクチャー）型授業」、「双方向型·対話型授業」、「ICT授業」などと呼ばれる新しい学習スタイル

【図1】



ラーニングピラミッド
※出典:The Learning Pyramid
アメリカ National Training Laboratories

を含めた、いわゆる「21世紀（未来）型教育」と表現される教育の手法だ。

こうした新たな「学びのスタイル」を、自らのめざす理想や教育理念と照らし合わせて、「本校は、今後の社会で必要とされる力を育てるために、こういう教育をしていきますよ」ということを、受験生と保護者に向けて広くわかりやすく発信した私学が、今春2016年の中学入試でも注目され、人気を高めるケースが目立ったということなのだ。

現行の大学入試でも成果を伸ばし、今後の入試改革にも対応できる「21世紀型教育」が人気を集めた

そして、首都圏における中学受験者数の減少が2014年入試でいったん底を打ち、2015年から2年続きで再び増加に向かった背景には、やはり「保護者の意識の変化」がある。

そのひとつが、昨年2015年の中学入試に挑み、4月から中学に入学した子どもたちが最初の当事者となる「2020年大学入試改革」に象徴される今後の日本の教育改革の動きに、保護者が敏感に反応したということだ。

この「2020年大学入試改革」については、昨年2月の中学入試シーズンの後に（大学入試と合格発表シーズンに合わせて）、マスコミで話

首都圏模試センターが選んだ　2016年首都圏中学入試 重大ニュース

1　私立中入試の多様化
2　マスコミが「思考力入試」に注目！
3　2年続きで受験者総数は増加へ！
4　三田国際の人気さらに増加（のべ2,120名→3,088名）
5　開智日本橋も大人気（のべ944名→1,898名）
6　桐朋が1回→2回入試で大人気
7　法政二中が共学化→女子に大人気
8　サンデーショック揺り戻し　桜蔭･雙葉など予想通り
9　豊島岡女子、洗足学園、吉祥女子の人気増
10　鷗友学園女子3回→2回入試で、2/3②に優秀生が増加
11　男子難関校では武蔵、海城、芝が人気増加（事前の予想外？）
12　埼玉では淑徳与野･浦和明の星女子が人気増
13　大学付属校（～日大･東海大系まで）に人気増加傾向
14　神奈川では日本大学中(日吉)・山手学院が人気増
15　適性検査型・思考力型入試 1,000→2,000→3,000→約6,000名
16　私学の適性検査型･思考力型入試実施校が大幅増（56校→86校）
17　私学の英語入試実施校が大幅増（33校→54校）
18　帰国生入試の応募者増
19　大妻中野の学内･入試改革大成功→入学手続き者増加へ！
20　かえつ有明の「難関思考力入試」「思考力入試」に予想以上の受験者
21　聖学院の「思考力ものづくり入試」などへの注目高まる！
22　共立女子、品川女子学院、光塩女子学院の新タイプ入試に予想以上の受験者
23　インターネット出願導入校増加→直前出願の増加→実受験率アップ
24　初めての「習い事入試（中村中ポテンシャル入試など）」が出現
25　工学院中で2/12に追加入試で「難関思考力テスト」新設
26　公立中高一貫校の志望者が全体的に減少（目立った増加は小石川のみ）
27　千葉県立東葛飾中は1,157名の志願者（→県立千葉は912名→793名に減少）

土曜日　朝日新聞（夕刊）

首都圏の国立・私立中学受験者数の推移
栄光ゼミナール調べ。2016年度は推計値

私立中入試 多彩

「80分以内 作品制作を」
「成熟社会 どう生きる」
発想・表現力評価

80分以内に、与えられた材料とテーマで作品をつくりなさい――。2月1日に東京都などを始まる私立中学入試で、こうしたユニークな問題を採り入れる動きが広がっている。子どもの能力を幅広くみるのが狙いだが、受験者数の伸び悩みや、大学入試改革も背景にある。

「この材料を使って与えられたテーマの作品を完成させ、150字程度の解説も書きなさい」

男子校の聖学院（東京都北区）は今年初めて、こんな問題を出す。名づけて「思考力ものづくりテスト」。2月1～4日に計7回行う入試のうち1回で導入する。他の回は国語や算数などの学科試験が中心

ユニークな中学入試問題の例

かえつ有明中
次の10個のものを、基準を決めて二つのグループに分類し、基準が分かるようにグループに名前をつけなさい。
・石　・落ち葉　・折り紙　・フェルト　・木片　・ストロー　・ペットボトルのキャップ　・どんぐり　・発泡スチロール　・リボン

共立女子中
人を力で押さえつけようとして失敗した例を挙げなさい。身近な体験、社会的なできごと、歴史上の事件でもかまいません。どうすれば失敗を防げたかも書きなさい（300字以内）

品川女子学院中
「成熟社会」を生きるために、小学生のあなたが明日から出来ることは何だと思いますか。自分の放課後や家庭での生活をふりかえり、根拠を入れて300字以内で述べなさい

各校のサンプル問題や、過去の問題を要約

2016年1月30日の朝日・毎日新聞の夕刊では私立中入試の多様化が紹介された（写真は朝日新聞）

28　栄東の試し受験組が一部他校へ流れた（星野、開智1/11・12、浦和実業…）
29　千葉日大が12/1第一志望入試新設→志願者132名
30　専修大松戸が人気増加→甲子園の影響？
31　横浜隼人（新校舎人気？）、自修館が人気増加
32　渋谷学園渋谷、広尾学園、東京都市大等々力など共学校が人気増
33　神田女学園2/1「適性検査型入試」志願者45名が全員受験（受験率100％）
34　東洋大京北　難化の影響で減少か？
35　明大中野・明大明治の志願者が減少傾向
36　東京都市大付属の志願者減（桐朋の影響か？）
37　青稜の人気増加目立つ！（新校舎の影響？）
38　芝浦工大の人気増加（新校舎・有明移転）
39　淑徳中も人気増加
40　立教新座も人気増加（新校舎？）
41　逗子開成の②③回入試の志願者大幅減→Web出願の影響
42　佼成学園の人気増加目立つ（東大合格＋適性検査型入試）
43　日大豊山（新校舎）、足立学園（東大合格）も人気増加

題にされることが急激に増えてきた。したがって昨年までは、中学入試の人気動向への影響は少なくても当然だった。

しかし今春2016年の中学受験生の保護者は、その後1年間にわたって、この話題に触れ、わが子が大学入試に挑むときの変化も思い考えたうえで、受験～入学を希望する学校を選択してきたことになる。この「2020年大学入試改革」には、いまだ賛否の議論や技術的な可否についての検討も続けられていて、本格的な導入～実

施は当初の計画より少し遅れる見通しもある。しかしそれでも、すでに「大学入試が変わりつつある」ことは事実だ。

現在の小学校6年生が大学入試に挑む年には、現在の「大学入試センター試験」に代わる、①「高等学校基礎学力テスト（仮称）」と②「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」が新たに導入され、国公立大学や私立大学の「個別選抜」の入試問題の内容や形態が大きく変化することは間違いない。

二つの「共通テスト」の同一年度内の複数回実施は（改革の初年度は）見送られることになりそうだが、CBT方式での実施と採点は、遅かれ早かれ現実化されることだろう。ましてや、英語における民間の資格・検定試験の導入・活用は、ほぼ間違いないといわれている。

②の「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」では、「教科型」に加えて教科・科目の枠を超えた“思考力・判断力・表現力”を評価するため、「合教科・科目型」「総合型」の問題を組み合わせて出題される。「知識・技能を活用して、自ら課題を発見し、その解決に向けて探究し成果等を実現するための力を評価する、PISA型の問題を想定」するとされ、すでに昨年末にはサンプル問題も公表された。

こうした新たな大学入試制度が導入される目的は、この先の世界、社会で生きていくために求められる課題発見・問題解決の力を育てるためであり、そのベースにある理念は、従来の高校教育や大学入試（＝日本の教育）で重視された知識修得型の学力観、教育観を大きく変えてしまうものでもある。「日本語IBプログラム」やアクティブ・ラーニングの導入推進の背景にも、こうした考え方がある。

よく見ると、今春2016年の大学入試でも成果（合格実績）を伸ばした私学のなかには、先の「21世紀型教育」の要素を多分に取り入れ、すでに多くの授業でそれを実践してきた先進的な私立中高一貫校が数多く見られる。

たとえば東大への合格者の増加が目立った渋谷教育学園幕張をはじめ、先進的な教育のスタイルを導入している多くの私立中高一貫校が、それぞれ各私学オリジナルの「21世紀型教育」的な探究・体験・調査・研究・発表・グループ（協同）学習を通じて育てた力を生かして、現在の大学入試でも公立高校や公立中高一貫校に勝る成果を発揮しているのである。

私学と生徒の新たな出会いを生んだ、「思考力入試」や「習い事入試」！

次に、入試形態（入試問題内容）についての特筆すべき変化に触れておきたい。冒頭では「私立中学校の入試の多様化」について述べたが、実は今春2016年の中学入試シーズンに、新聞やTVなどのマスコミが最も注目したのは、いくつかの私立中学校が実施した「思考力入試」だった。むしろ「思考力を問う」入試傾向全般だというべきかもしれない。

聖学院の思考力ものづくり入試、かえつ有明や工学院大学附属の思考力入試・難関思考力入試には、数はさほど多くなくとも、そういう形態の入試ならば「受けてみたい」と考える意欲的な受験生が集い、合格者はかなり高い率でそれらの私学に入学したという。

また、前のページの「重大ニュース」の22位に「共立女子、品川女子学院、光塩女子学院の新タイプ入試に予想以上の受験者」として紹介した、この3校の女子校の「論述・表現・総合型」の入試にも、学校側が考えていた以上に多くの受験生が集まり、多くが素晴らしい解答（記述答案）を書いてくれたという。

共学化・校名変更の初年度となった昨年は、全回の入試で男女のべ2120名（その前年は女子194名）という多くの志願者を集めた三田国際学園中（旧・戸板中）。今年はさらに、のべ3000名を越す志願者を集めた。

これらの入試も、先の「2020年大学入試改革」で問われる力と、その先の社会でも求められる力を見通し、そうした力を中高6年間で育てるために、私立中高一貫校が小学生に向けて「うちの学校ではこういう学びをしますよ」と発信してくれたメッセージと理解すべきだろう。

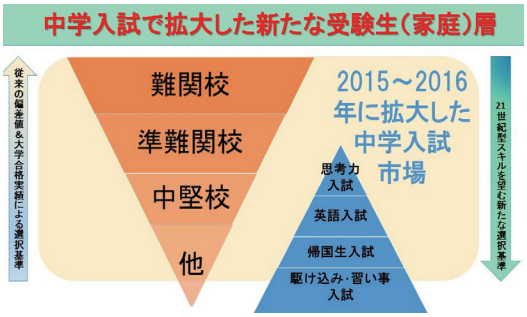
そういう意味では、先の「思考力入試」をはじめ、今春の入試でも目立って増えてきた私学の「適性検査型入試」や「英語（選択）入試」、今年初めて登場した「習い事入試（自己アピール入試）」、さらに増加した帰国生入試などは、すべてこうした「私学からのメッセージ（ラブコール）」だと解釈してもよいだろう。

とくに、中村の「ポテンシャル入試」や宝仙学園理数インターの「リベラルアーツ入試」に代表される「習い事入試（自己アピール入試＝子どもたちが打ち込んできたスポーツや音楽・芸術、英会話などの活動歴・学習歴を評価して迎え入れ、多様なバックボーンを持つ生徒が共存する新たな教育環境をつくることを目的とした入試）」は、中学入試の従来の常識を超えた、新たな選抜形態だ。こうした新たな入試形態が生まれたことが小学生の家庭に周知されれば、さらに多くの「様々な習い事に励んできた小学生」が、中学入試に挑んでくることが考えられる。

日本の教育の転換期を迎えた2016年入試は、「21世紀型の」教育観・学力観が焦点に！

そして、そういう「入試の多様化」が進む一方で、変わらず高い人気と難易度を維持した難関校、準難関校は、やはり高い学力と合格力を持った受験生同士の激戦となり、今月の模試の資料としてご紹介した「2016年入試結果偏差値」を高めた。関心のある方は、巻末の「結果偏差値」の一覧表中で、数値を前年より高めた私学に注目してほしい。

今年も908名（昨年は916名）と昨年並みの志願者を集め、根強い人気を示した麻布中の入試風景。



その一方で、難易度としては全体の中堅～中堅下位に位置していた私学のなかにも、「入試結果偏差値」を高めたケースがいくつもある。これらの人気と難易度上昇の傾向は、おそらく来春2017年入試でも受け継がれることだろう。

もうひとつ昨年から今年にかけての中学入試で浮き彫りになった「親の意識の変化」のひとつに、これまで保護者にとって学校選びの非常に大きなファクターと思われてきた大学合格実績（進路）についても、「大切なのはそれだけではない」といわんばかりに、従来とは少し違った視点や価値観で、わが子の学校選びをする（多くは若い世代の）保護者が目立ってきたことがあげられる。

ことさら、わが子の難関（有名）大学進学にはこだわらず、むしろ豊かな体験を重視する、別の価値観や教育観で学校選びをする保護者が増えてきたといってもいいだろう。

旧制７年制高等学校や大正自由教育運動の系譜に連なる成蹊、成城学園、玉川学園などの人気が高まったことは、そうした動きの象徴ともいえるだろう。

そうした若い保護者の世代の意識の変化が、さまざまな意味で入試の動向にも反映されたのが、今年2016年の中学入試だった。

さらに、そうした新たな保護者の価値観、学校選択の価値基準によって、「偏差値にとらわれ

来春2017年入試に向けた新たな動きと入試改革（＝入試要項変更）

●横浜市立サイエンスフロンティア高等学校附属中学校が開校。

首都圏の新たな公立中高一貫校として、神奈川県（横浜市）に開校される同校。理系教育に定評があり、今春は東京大学6名の現役合格者を出す実績もあげているだけに、定員男女80名のところへ、非常に多数の志願者が集まる可能性がある。難易度も、すでに横浜エリアで大人気の横浜市立南高等学校附属中と同等か、それ以上の難易度になる可能性も考えられる。

●芝浦工業大学中が豊洲の新キャンパスに移転。国･算･理の3教科入試に。

現在は板橋区にある同校が、来春2017年には豊洲の同大学キャンパスに近接する新キャンパス･校舎に移転。校名を芝浦工業大学附属と改め、中学入試も「国･算･理」の3科目で行われる。中学（中高一貫部）は変わらず男子校だが、高校からは理系をめざす女子を1クラス募集開始。

●東邦大学付属東邦が12月に定員30名の推薦入試を新設。

東邦大学付属東邦が、2017年からは高校募集を停止（帰国生入試のみ実施）することにともない、中学の募集定員を270名から300名に変更。12月1日に定員30名の推薦入試（第一志望入試）を新設する。かつて現在の小学生の保護者の世代の受験時には千葉の中学入試の最難関に位置し、いまだに根強いファン層を持つ学校だけに、高い人気となることが予想される。一般入試（前期･後期）と変わらぬ難易度になる可能性が大か。

●大妻中野が2月4日に「新思考力入試」を新設

今春2016年入試でも、様々な教育改革と合わせ、中学入試でも「グローバル入試（＝英語入試）」を新設し、高い人気を集めた同校。続く2017年入試でも、独自のコンセプトによる「新思考力入試（仮称）」を新設する。新たな受験生層を掘り起こし、高い人気を集める可能性がある。

ほかにも、明治大学付属中野八王子が2月5日午後に「4科総合型入試」を新設する予定もある。

●共立女子がC日程「記述型（合科型論述＋算数）入試」を2月3日に変更。

今春2016年入試では3回目のC日程を2月4日「記述型（合科型論述＋算数）入試」という新たな形態で実施し、手ごたえを得たという共立女子は、来春2017年にはこのC日程を2月3日に変更する。これによって同入試は東京都内の公立中高一貫校とぶつかるが「あえて公立の適性検査とは一線を画したい」というコンセプトで入試日変更に踏み切る。近隣の大妻3回との人気競合は必至か。

他にも、三輪田学園が今春は2月4日に実施した3回目入試を2月3日に移行することを公表している。

今年は2月1日の第1回、3日の第2回とも志願者を増加させた海城中の2月3日入試風景。

ず」「偏差値を飛び越える」ような、柔軟な学校選択をするケースも目立ってきた。

そして、そこで選ばれた学校には、いわゆる「21世紀型教育」と“世界標準の”学びのスタイルを標榜し、「子ども（生徒）自らが自発的･能動的に“楽しく学べる”授業スタイル」を導入～実践しようとしている私学が多かったことに注目しておくべきだろう。

そして来春2017年入試では、上のコラムにも紹介したように、すでにいくつかの大きな動き（入試要項変更）が公表されている。

そうした教育をめぐる大きな変化のもとで、来春2017年入試で、わが子にとってベストの学校選びができるように、ぜひ保護者は情報収集のアンテナを研ぎ澄ませて、できるだけ多くの学校を見学していただきたい。

そして同時に、来春2017年入試での、わが子の“合格”への突破口を見出せるよう、いい形で新6年生としての受験準備の歩みをスタートさせていただきたいと願っている。